

M-GTA 研究会 News Letter No.84

編集・発行：M-GTA 研究会事務局(立教大学社会学部木下研究室)

メーリングリストのアドレス： grounded@ml.rikkyo.ac.jp

研究会のホームページ： http://m-gta.jp/

世 話 人：阿部正子、小倉啓子、木下康仁、倉田貞美、小嶋章吾、坂本智代枝、
佐川佳南枝、竹下浩、田村朋子、丹野ひろみ、都丸けい子、根本愛子、
林葉子、宮崎貴久子、山崎浩司（五十音順）

<目次>

◇第4回合同研究会報告

【第1グループ】	3
岩本 綾:高校交換留学体験者の進学先決定プロセス	
【第2グループ】	8
貝塚 陽子:摂食障害回復者の心理的变化過程	
【第3グループ】	10
野尻 明子:認知症高齢者とのライフレビューブック作成をととした作業療法学生の 変化のプロセス	
【第4グループ】	13
松永 妃都美:震災を契機に(母子で)自主避難した母親の経験的プロセス	
【第5グループ】	17
増井 香名子:関係離脱後の DV 被害者が、自分自身の生活/人生を再生していく プロセス	
【第6グループ】	21
大友 秀治:スクールソーシャルワーク活用事業を発展させるスーパービジョンモデル の構築:「効果的なスクールソーシャルワーク事業プログラム」に着目 して	

◇近況報告(領域／キーワード)(五十音順)..... 24

岡本 茂(小児科領域／川崎病)

原田 美穂子(成人・老年看護学領域／ボディイメージ)

宮城島 恭子(看護学／小児がん経験者)

山本 裕子(看護／看護教員)

◇第 77 回定例研究会のお知らせ	26
-------------------------	----

◇編集後記	27
-------------	----

◇第4回合同研究会報告

【日 時】2016年8月20日(土)10:30～18:00、21日(日)9:00～12:30

【場 所】大阪府立大学中百舌鳥キャンパスA5棟

【出席者】93名

浅川 雅美(文教大学)・阿部 正子(長野県看護大学)・綾戸 ゆかり(熊本大学)・石井 友恵(早稲田大学)・石塚 千賀子(新潟大学)・伊藤 美千代(東京医療保健大学)・岩崎 美香(明治大学)・岩本 綾(信州大学)・上野 陽子(県立広島大学)・大井 安治(白梅学園大学)・大谷 哲弘(岩手大学)・大友 秀治(北星学園大学)・岡本 茂(洛和会音羽病院)・小倉 啓子(ヤマザキ学園大学)・長田 尚子(立命館大学)・貝塚 陽子(白百合女子大学)・加藤 志保子(帝京大学)・上山 千恵子(日本赤十字看護大学)・唐田 順子(国立看護大学校)・川口 めぐみ(福井大学)・川端 奈津子(群馬医療福祉大学)・河本 乃里(山口県立大学)・木下 康仁(立教大学)・杳脱 小枝子(山口大学)・倉田 貞美(浜松医科大学)・黒岩 晴子(佛教大学)・後藤 喜広(東邦大学)・阪上 由美(武庫川女子大学)・佐川 佳南枝(熊本保健科学大学)・櫻井 一江(順天堂大学)・佐々木 秀夫(慶応義塾大学)・佐保 美奈子(大阪府立大学)・塩川 幸子(旭川医科大学)・清水 聖子(藤沢市鶴沼南地域包括支援センター)・清水 史恵(大阪府箕面支援学校)・菅原 至(上越教育大学)・杉原 努(京都文教大学)・鈴木 育美(札幌国際大学)・鈴木 祐子(東都医療大学)・鈴木 由紀子(浜松医科大学)・清野 弘子(日本通運株式会社)・高 祐子(複十字病院)・高橋 信雄(放送大学)・滝澤 寛子(京都学園大学)・立矢 由佳(東京大学)・田中 智子・谷岡 三千代(尾中病院)・谷田 悦男(星槎大学)・田村 朋子(清泉女子大学)・都筑 千景(神戸市看護大学)・詰坂 悦子(順天堂大学)・得津 慎子(関西福祉科学大学)・徳永 冴果(さいたま赤十字病院)・長崎 和則(川崎医療福祉大学)・長住 達樹(九州栄養福祉大学)・長山 豊(金沢医科大学)・生天目 禎子(帝京大学)・西平 朋子(沖縄県看護大学)・根本 愛子(国際基督教大学)・野尻 明子(熊本保健科学大学)・早坂 純子(国際医療福祉大学)・林 葉子((株)JH 産業医科学研究所)・原田 美穂子(関西看護医療大学)・春木 裕美(大阪府立大学)・平川 美和子(弘前医療福祉大学)・吹原 豊(福岡女子大学)・藤原 志帆(熊本大学)・藤原 尚子(千里金蘭大学)・古山 美穂(大阪府立大学)・前田 和子(茨城キリスト教大学)・牧野 真弓(富山大学)・増井 香名子(大阪府立大学)・松戸 宏予(佛教大学)・松永 妃都美(佐賀大学)・松野 恭子(東亜大学)・松元 悦子(山口県立大学)・三木 晶子(東京大学)・神子上 暁(龍谷大学)・三ツ橋 由美子(国際医療福祉大学)・宮城島 恭子(浜松医科大学)・宮崎 貴久子

(京都大学)・森山 雄三(九州看護福祉大学)・安田美予子・山崎 浩司(信州大学)・山崎 義広(新潟大学)・山野 則子(大阪府立大学)・山本 裕子(京都府立医科大学)・横田 宜子(原三信病院)・横森 愛子(山梨県立大学)・吉村 春美(東京大学)・若林 馨(国際医療福祉大学)・和田 恵美子(藍野大学)・渡邊 節子(中京学院大学)

【第1グループ】

岩本 綾(信州大学全学教育機構 非常勤講師)

Aya IWAMOTO : Shinshu University, School of General Education

高校交換留学体験者の進学先決定プロセス

The Process in which ex-Exchange High School Students Decide on Their University

1. レジューメ(事前配布資料)

1.1 研究の背景

留学への関心が高まるなか、高校生の留学にも注目が集まっている。一般に留学は大きなインパクトをもたらす体験として認識されているが、留學生の年齢や立場によって留学中に得るものは異なる。横田(1997)は、いずれも留学期間が1年間である大学生の留学と高校生の留学を調査し、大学生が異文化と自文化という「兩岸を共に眺めようとする一歩離れた認知的試み」をするのに対して、高校生は「初めはこちら岸にいて向こう岸をみているが、かなり積極的に向こう岸に泳いでいこうとしていて、実際に泳いで渡ってしまうことさえあるような、より全人的な」比較をすると述べている。現地人化ともいうべき変化をする高校生の留学は、帰国後の生活にも大きな影響を及ぼす。

いっぽうで、高校生や高校教員、保護者にとって、高校卒業後の進路選択は大きな関心事であり、留学はしてみたいが大学入試に不利になるのでは、といった懸念がよく聞かれる。これに対して、交換留学(10ヶ月間現地でホームステイをしながら現地の高校に通うプログラム)の体験者は、交換留学が将来設計にポジティブかつ決定的な影響を与えたことをこれまで繰り返し述べてきた(例えば馬越 2005)。しかし実際には「受験が優先」「意味がない」「留学先が将来に役立つか不明」「他の生徒が進路で影響を受ける」などといった理由で、留学希望者が反対を受けることは今も珍しくない。反対する4人にひとり高校の教師であり(AFS 日本協会 2002)、交換留学が進路選択に与える影響について、教師が否定的な見解や不安を持っているケースは決して少なくないといえる。

今後、留学体験者への進路指導の機会はますます増えていくと考えられる。これまで、交換留学を体験した者の卒業後の進路選択は個人の問題であると考えられ、高校や留学を主催する「交流団体」が積極的に関与することは少なかった。しかし、昨今高校生の留学に注目が集まっていることに加え、高校での進路指導は個人の希望や「自己理解」、「自己選択」をより重視する方向に変

化している(荏谷 2003)。留学からの「帰国後」については、高校留学に限らず全般的に研究が希薄である(高濱・田中 2011)が、大きな変化を遂げて帰国した生徒に対して適切な進路指導を行うため、また留学を希望する生徒に適切な留学指導を行うために、留学中のどのような体験がどのような形で進路選択に影響を与えるのかを理論化し、現場の教員が参照できるかたちで提示することは喫緊の課題である。

本研究に先立ち、研究1では高校交換留学を体験した大学生への調査から、高校交換留学の特徴的な体験を描き出すとともに、帰国後にそれらの体験の意義が認識されていくプロセスを明らかにした。本研究は、それをふまえたうえで、特に進路指導についての手がかりを得ることを目的に、高校交換留学体験者がどのように進学先の大学を決定していくのかを明らかにする。

1.2 分析テーマ

高校交換留学体験者が進学先の大学を決めていくプロセス

1.3 分析焦点者

日本から高校交換留学を体験し、日本の高校を卒業後、大学に進学した者のうち、高校交換留学が進路選択になんらかの影響を及ぼしたと考える者 * 大学には短大を含み、高卒後すぐに進学しない者も含む

2. DP として参加しての体験、学んだことや感想

この度は合同研究会にデータ提供者として参加させていただき、ありがとうございました。スーパーバイザーの小倉先生と黒岩先生には大変お世話になりました。私の研究やインタビューデータに関心を持っていただき、大事にしてくださったうえで、グループのみなさまの勉強になるようにとセッションを進めてくださいました。このデータでの論文が未発表であることから資料の取り扱いに気を遣ってくださったことも大変ありがたかったです。

二日間のセッションは、私にとっても大変有意義でした。今回提供させていただいたインタビューデータは、合同研究会以前に山崎先生のスーパーバイズを受けながら自分で分析を一通り終えたものでした。セッションでは概念を数個作るころまでを行い、その間に自分の分析テーマや解釈が大きく揺らぐということはありませんでしたが、第1グループのみなさまのお考えをお聞きして、「私も初めはそういうふうに考えていたのだった」と思い出すことが何度もありました。そこからどのように今の分析テーマ・解釈にたどり着いたのかをもう一度たどることによって、自分の視点の据え方を再確認するという貴重な体験ができたと思います。例えば、インタビューで語られている「留学の影響」には、私が分析テーマとした「大学進学」ととどまらない内容が含まれているので、分析テーマをもっと広くとりたいというみなさまの意向は大変共感できました。しかし、そこからあえて分析テーマを現在のような形に絞っていった(分けていった)ことを思い出し、それは自分の研究が留学の効用を説くためではなく、留学生の指導に当たる現場に役立ててもらうためのものであることを判断の基準にした結果であったと再確認しました。同時に、自分の分析テーマは一つの切り口にすぎず、もっと重要なテーマが存在するかもしれない可能性も感じました。

また、グループのみなさまが研究の概要や調査対象者についてさまざまな質問を寄せてくださったことは大変ありがたく、それらにお答えすることを通してこの研究に対する自分の理解が深まっ

たように感じます。特に「現時点で岩本さんはどのような指導が望ましいと思っていますか」という質問は、事前にお配りした資料から考えて明確にお答えしなければならない点ですが、これまで直接的には受けたことがない質問でした。大急ぎで頭を回転させて答えたのですが、この点についてまだまだ考えが足りないことを認識させられました。

反省点としては、セッションの冒頭でグループのみなさまに対し、私自身はこのデータでの分析を一通り終えているとお伝えしてしまったことで、第1グループのみなさまに初めから「正解」や望ましい方向性があるかのような印象を与えてしまったのではないだろうか、という点があります。セッションでは小倉先生や黒岩先生にさまざまな解釈があり得ることを強調していただきました。

合同研究会での学びを、これからの研究に反映させていきたいと思います。ご準備くださった先生がたをはじめ、参加者のみなさまに心よりお礼申し上げます。

【SV コメント】

黒岩 晴子（佛教大学社会福祉学部）

グループ 1 では、岩本先生から提供された貴重なデータと詳しい解説、参加者の方々の真摯な討論によって進行了。以下に、2 日間の進進行を記しております。結果図とストーリーラインまでは進みませんでした、初学の方もおられるのでゆっくり丁寧にすすめることを心がけました。

ワークショップの進行

1日目

1. 参加者の自己紹介
2. DP より研究概要の説明
 - ・研究の背景
 - ・本研究の意義
 - ・M-GTA に適した研究であるのか
 - ・データの収集方法と範囲
 - ・分析焦点者の設定
 - ・調査対象者の属性
 - ・分析テーマについて
3. 参加者で分析テーマと分析焦点者を考える。

留意事項

- ・分析テーマの設定と1 概念の生成までを丁寧に行うために参加者で共有する。
4. メインとする事例を検討
 - ・2 事例が提供された。

留意事項

- ・分析テーマが決まって、分析テーマにとって情報量・質の高い方を選ぶ

5. 概念生成

留意事項

- ・皆で共有した分析テーマに添って、概念を生成する作業に入る。
- ・数よりも分析ワークシートを用いた丁寧な進行をこころがける。

①各自がまず着目した箇所を発表。重なりが多かった箇所を最初に取り上げて、概念生成を始める。

②理論メモの活用する。

その個所について考えたことや多様な解釈、気づきを理論メモに記入、発表、シェアする。気づきの中で大事なのは、関連しそうな事柄への気づき、セット・ペアで考えること。この時点で理論的サンプリングの意識を持つ。

③定義を考える。

理論メモでの思考の言語化を経て、他のデータにも使える解釈かどうか、適切な抽象度かどうかを検討してどの解釈を採用するか、今時点での判断をして定義(各自考え発表)する。

④概念1に名をつける。

コンパクト、インパクト、感覚的、動的に行う。各自が提案する。

⑤概念1の完成を目指す。

留意事項

- ・定義1、概念1で説明できるか、継続比較分析で確認する。つぎに多様な場面を見出し、分析ワークシートレベルの理論的飽和化を目指す。
- ・分析テーマを意識しながら、分析焦点者の視点に立って解釈を進めていく作業を丁寧にすすめる。そこでの思考過程を言語化することが重要。
- ・同じバリエーションを捉えている概念、似通っている定義の共通性を確認する
- ・概念間の関係性を検討する
- ・定義や概念名の些細な言葉の違いも板書し、提案者から説明してもらい、皆で検討した。判断の正誤ではなく、判断の根拠を確認し、的確に言語化する姿勢を学んだ。
- ・対極例を意識する
- ・分析テーマに引きずられ、データを検索・分類していないかを確認する。
- ・丁寧に分析、作業することと、暫定的に判断を行い決断し作業をすすめる。この二つを行き来しながらダイナミックにすすめる。このことは常に「頭の中にあることを外へ(言語化)」ことで可能になる。メモを活用し 思考の軌跡が分かるようにしておく。
- ・同じデータに着目した人がいれば発言してもらおう。概念と定義を丁寧に検討する

SVor のコメント

M-GTA の基本に素直に従い、丁寧に学習・確認を進めることが結局は早道。分析テーマ・分析焦点者に照らし、データに密着し、帰納的方向と演繹的方向を使って、理論的サンプリング・継続比較分析・理論的飽和化を同時進行させながら、分析ワークシートを用いて、具体例の着目、幅広い

解釈やアイデアを理論メモに書き、定義、概念命名へというステップを踏む。この地道な流れを体験し、習慣にすることが大事。理論メモを有効に活用できないと、解釈に至った過程が分からない、浅い解釈になりがち、次の分析につながる視点が得られないなどの結果になる可能性がある。最初の概念生成を地道に丁寧に進めることで、M-GTA の基本がわかりやすくなる。

1日目の宿題

- ＊事例の概念を考えてくる。
- ・二つのバリエーションを取り上げた。
- ・2 グループのメンバーそれぞれが、一つのバリエーションから一つの概念を考える。

2日目

1. 宿題の発表
2. 概念生成
3. 感想の共有

M-GTA 研究会の WS のよさは初学の方も、すでに研究を進めておられる方も一緒に学ぶことができることだと思います。WS の最後に感想を共有しましたので、少し紹介します。

- ・書物に書いてある事が、具体的にイメージできた。
- ・現場実践に役立つ視点で考えるという事を研究者として貫く姿勢は非常に勉強になった。
- ・もう一回、これまでの論文を見直したいと思った。
- ・定義を作って概念を出していくところがすごく難しく感じた。それを行っていく上で、人によって現象の捉え方や解釈が違うことを体感したすごいグループワークだった。
- ・GTA を学んでいたが、M-GTA に興味を持って勉強するために参加したが、いろいろ混同していたところなどがわかり、その違いがよく理解できた。
- ・ディスカッションの中で、自分は本を読んで理解していると思っていたところ自体が間違えていたことに気づくことができた。データに忠実に、そして常に分析テーマや分析焦点者を確認しながら行っていくこと、そして変化していくものだというところが分かった。
- ・本で読んだ時は分からなかったが、分析の過程で動きがあることや社会的存在のプロセスが、何かしっくりくるものを「あっそうなんだ」と、フッとお腹の中に落ちるような、そういう経験ができた事が一番大きかった。

SVor の小倉先生から、研究会は今後も遠慮なく質問や声をかけてほしい、ご縁を大切にとの優しい言葉かけをしていただいたことは参加者の安心につながったと思います。また、お互いに実践現場に役立つ研究を進めていくことが共有されたと思います。

なお、ワークショップの詳細につきましては、参加者の方々に録音について了解をいただきましたので、記録を残す作業を進めています。参加者から出された質問や意見、DP の解説、SVor のコメント等の記録を整理したいと思っています。ライブ記録まではできないと思いますが、WS を振り返

り M-GTA の学びを深める一助になればと思います。グループに参加された方のご要望がありましたら、お渡ししたいと存じます。

～SVor を担当して～

今回、自分の名前が SVor として上がっていたことの驚きから始まりました。これまで、西日本 M-GTA 研究会では補助としての経験のみで、WS での経験がありませんでした。小倉先生にそのことをお伝えすると「大丈夫だから」という優しいお言葉とさまざまなお気遣いやご配慮をいただきました。しかし初めての不安は大きく、山崎先生に SV の手引きかマニュアルがないかおたずねしました。すぐ対応いただき、ガイドライン第 2 版と第 3 版、ワークショップの報告が掲載されたニューズレターを送っていただきました。ガイドラインでは、グループによる自主性を重んじて、若干の進行の違いはあってもよいとのことでした。そこで、ガイドラインから、いくつかのグループの進行を参考に進行案を作成し、小倉先生にみていただきました。すぐに小倉先生がご確認くださり、進行についてだけでなく、SVor として押さえるべき要点やその意味、とても詳細な重要事項等を解説付きで返信くださいました。このようなメールでの事前打ち合わせに助けられて当日に臨みました。

しかし、進行の過程では、DP の方や参加者の特性に合わせ、M-GTA の学びが深められるよう進める難しさを感じました。さらに M-GTA では、徹底して実践現場に視点をおいた研究姿勢が求められること、M-GTA だけでなく広い見識が求められることを痛感しました。小倉先生からは参加者の方々の多様な質問への丁寧な解答、進行の過程での適切な介入や助言がなされました。参加者は M-GTA の理解を深め、活用する上での留意点など多くを学ぶことができたと思います。私は、木下先生が講演された質的研究法習得の道(学ぶ/習う → 使う → 教える)の意味を理解することができました。

無事終了させていただき感謝の気持ちでいっぱいです。参加者のみな様、岩本先生、小倉先生、運営に当たっていただいた世話人の皆様、西日本 M-GTA 研究会等、関係者のみな様に御礼を申します。

注:ガイドラインに基づいて、スーパーバイジングを「SV」、スーパーバイザーを「SVor」、データ提供者を「DP」、ワークショップを「WS」と表記しています。

【第 2 グループ】

貝塚 陽子（白百合女子大学発達臨床センター）

Yoko KAIZUKA : Clinical Center for Developmental Disorders, Shirayuri College

摂食障害回復者の心理的变化過程

Psychological process of the recovers from eating disorders

1. 研究の概要

- ① 研究のタイトル 「摂食障害回復者の心理的变化過程」
- ② 研究の目的 摂食障害に罹患した患者が回復するために必要な心理的变化を明らかにすること。
- ③ 研究の方法 半構造化面接でインタビューを行い、修正版 M-GTA で分析を行う。
- ④ インタビュー対象者 摂食障害家族会及び紹介で知り合った摂食障害からの回復者 15 名

<インタビューガイド>

- ・発病のきっかけから回復まで
- ・医療者との関わり
- ・行動化とその時の思い
- ・回復のきっかけとなったこと
- ・病気を経験してどう変化したか

2. 研究の背景

摂食障害は、主に思春期から青年期の女性によくみられる疾患で、痩せることや食事への過激なとらわれから、極端な食事制限や過食などを行い、様々な精神症状・身体症状を呈する疾患であり、主として拒食症[神経性やせ症／神経性無食欲症(anorexia nervosa:AN)]と過食症[神経性過食症(bulimia nervosa:BN)]に大別されている。

また、摂食障害は治療が困難で回復が難しい病であると言われており、主に精神医学や臨床心理学の領域から、どのような治療方法が有効であるかが長く研究されてきているが、未だに回復につながる唯一絶対的な治療が確立されていないというのが現状である。長く摂食障害治療に第一線で関わっている石川(2015)は、摂食障害患者が治療困難な理由を、「AN(拒食症)患者は、強いやせ願望や肥満恐怖を有し、病的に痩せている状況でもこれを否認し、自ら進んで受診することは少なく、周囲に勧められて受診しても、治療には非協力的であることが少なくない。一方 BN(過食症)患者は、コントロールできない過食に悩み、慢性的な無気力やよくうつ気分などを伴い自己評価が低く、治療から容易に脱落してしまうことが多い。こういった疾患の特徴から、摂食障害の治療は一般的には難渋することが多く、治療者は困り果ててしまうことも多い」と語っている。

筆者は総合病院の精神科で働く心理士で、臨床現場やサポートに加わっている摂食障害家族会で摂食障害の方々に会うことが増え、長く患うことの多い摂食障害という病が、その方の人生そのものを支配し、困難なものにしている事実と直面することになっている。そして、摂食障害の方々に治療者として一対一で関わろうとする際に、彼女ら、時には彼らの中に根付く大きな人間不信、治療意欲のなさ等に気づき、その治療関係作りの難しさ、関係維持の難しさに、無力感に襲われることが多くある。

そこで、この研究の目的は、摂食障害回復者当事者の立場から、回復するために必要であった心理的な変化を語ってもらい、その心理的变化過程を明らかにし、医療者が摂食障害患者を支援する上で重要となる点を考察することにある。

3. 分析焦点者 摂食障害回復者

4. 分析テーマ 他者を信頼し相互のコミュニケーションが取れるようになるプロセス(仮)

5. DP として参加の体験、学んだことや感想

この度は DP として参加させていただき大変感謝しております。

この研究は現在、分析中のものであり、自分では気づいていなかった視点からご意見やご教授をいただいたことは本当によい勉強になりました。日々の分析作業は孤独なものだと感じておりましたが、私のデータをグループの皆様で色々と話し合いをしていく作業は非常に有難いもので、また楽しくも感じられました。

この場をお借りして、SV をしてくださった都築先生、宮崎先生、第 2 グループの皆様に深く感謝を申し上げます。

【SV コメント】

都築 千景（神戸市看護大学）

合同研究会 WS の SV をさせていただくのは今回で 3 回目になりますが、いつでも新しい発見と驚きがあります。

今回の WS では、特に分析テーマを設定するところで苦戦しました。というのも、データがとてもリッチで、対象者の言葉のその奥にある思いや意識、またその動きがとてもよく伝わるものだったからです。本来は分析のステップを経てたどりつく“もの”が見えており、WS ではそれに焦点を当てるのか、それとも主題となっている困りごとに焦点を当てるのかについて、活発な意見が交わされました。次の日は、それぞれが考えてきた概念をふせんに書き、模造紙を真ん中にしてみんなで取り囲み、概念を並べ、概念の定義や動きについてディスカッションしました。そうしていると、自然に概念同士がつながってきて、模造紙のうえにカテゴリや関連図(らしきもの)が見えてきたのです。このような体験は私も初めてで、非常にワクワクする感覚を味わうことができました。タイトな時間の中、もう一人の SV 宮崎先生とみなさんと作り上げた有意義な時間だったと思います。ありがとうございます。

【第 3 グループ】

野尻 明子（熊本保健科学大学 リハビリテーション学科）

Akiko NOJIRI : Kumamoto Health Science University Department of Rehabilitation

認知症高齢者とのライフレビューブック作成をととした作業療法学生の変化のプロセス

The process of change of occupational therapy students in making of life review books

1. 研究の経緯

コミュニケーションは作業療法実践の基盤であり、作業療法士の教育においても重要な課題である。そのため、作業療法学生へのコミュニケーション能力向上にむけての養成校における様々な取り組みが報告されている。本学での卒業研究において学生は、認知症障害高齢者を対象に「ライフレビューブック」に「聞き書き」と「コラージュ」の要素をとりいれたオリジナルの『わたしのあしあと手帖』(以下、手帖)を作成した。作成開始当初は「会話が続かないので作成を続ける自信がない」「つじつまの合わない話ばかりで理解できない」と訴えたが、終了時には「一つの話でもずっと会話できる」「もっと話を聞いて深く知りたい」という訴えへ変化した。そこで本研究では、認知症障害高齢者との手帖作成を通じた学生の変化のプロセスを明らかにしたいと考える。

ライフレビューブック作成は一種の回想法であり、生まれてから現在までを振り返り、それぞれの年代のテーマとそのテーマに関する項目に沿って語ってもらい、写真などとともに載せた一冊の本である。高齢者への効果として【認知機能への効果】【自尊感情の増加】【悲嘆や抑うつ改善】などがあり、援助者への効果として【肯定的な側面の理解】【共通認識を形成】、【信頼関係と関係づくり】などが述べられている。

聞き書きとは、語りたいことを自由に語ってもらい(会話を録音)、感情を大切に聞き、語りを文字にする際は語尾、方言、語り口調を大切に、本人の話し言葉のまま、一人称で書き記した一冊の本である。

コラージュとは、様々な素材のものを(切り抜き、毛糸、折り紙など)自由に貼りつけるなどして自分らしさを表現するものである。

卒業研究でのライフレビューブック作成について

卒業研究では、特別養護老人ホームの入居中の認知症障害高齢者(簡単な日常会話は可能)を対象に手帖を作成し、対象者または担当のケアスタッフにどのような影響があるかを検討した。

手帖の作成は、週に1回(30～60分)程度を約6～8回、語りを聞く場所は居室やリビングなどの対象者が望むところで行った。学生は、対象者に自由に語りたいことを語ってもらい、ICレコーダーに会話を録音し、1回終了毎に逐語録を作成した。語りに関係する画像をインターネットなどから探し、次回に持参した。対象者にイメージにあう画像や手帖に載せたい写真を選んでもらい更に語りを聞いた。選んでもらった写真と語られたことを書き記して手帖のページを作った。次回はできたページを見ながら更に語りを聞き、これを毎回繰り返し、ページを増やしていき手帖を完成させた。

2. 方法

調 査 期 間:2014 年 11 月、2015 年 11 月(卒業研究終了後)

調査対象者:卒業研究で『あしあと手帖』を作成した 4 年生 11 名(2014 年 6 名、2015 年 5 名)

調 査 方 法:2~3 名ずつのグループインタビュー(60~90 分)を実施。インタビュー内容は同意を得て IC レコーダーに録音する。

調 査 内 容:「ライフレビューブック(あしあと手帖)作成からの学び」というテーマで、学んだこと、自分自身の変化を感じたこと、実習やボランティアとの違い、対象者との関係性の変化などについて聞き取りを行う。

3. 感想

今回は、DP として参加するという貴重な機会をいただき本当にありがとうございました。

私は、分析テーマを「認知症高齢者とのライフレビューブック作成を通した作業療法学学生のコミュニケーション深化のプロセス」として、分析焦点者を「卒業研究でライフレビューブック(あしあと手帖)の作成を行った作業療法学学生」としていました。しかし、みな様から様々なご意見をいただき、検討した結果、今回のワークショップでは分析テーマを「認知機能が低下した高齢者とのライフレビューブック作成を通した作業療法学学生の変化のプロセス」とすることになりました。SV の先生を含め 15 人の方から意見をいただきながら作業をすることで、いろいろなアイデアをいただくことができました。

そこから 7 つの概念ができました。〈録音の聞き直しによる気づき〉〈会話の意味を知る〉〈心理的な接近〉〈あたかも体験による共感〉〈病気からその人へのベクトルの変化〉〈聞き続け行動〉〈湧いてきた尊敬の念〉さらに 4 つのグループに分かれて、結果図をつくるという体験もでき、同じ 7 つの概念からそれぞれのグループから違うものがでて、着眼や意見をいただくことができました。新たな気づきをいただいた、濃密な 2 日間でした。このような貴重な場と時間を共有してくださった SV の先生方と参加者の皆様にありがとうございました。そして会を運営実行してくださった方々にもお礼申し上げます。

【SV コメント】

長崎 和則 (川崎医療福祉大学)

参加者のモチベーションはとても高かった。事前の課題については、皆さんが取り組まれており、ワークショップの進行がスムーズであった。

データについては、研究テーマと何を明らかにしたいのかということが、必ずしも明確ではなかった。研究テーマを吟味した上での分析というよりは、卒業論文指導の中で、偶然に生まれたことを分析しようとした印象を受けた。そのために、現象特性についての焦点化ができにくかったように思う。

しかし、この点については、研究を進めるさいにも同様のことが起こりうることであり、研究テーマが分析によって絞り込まれるプロセスを共有することにつながったのではないかと思う。

ワークショップの運営としては、何を明らかにしようとしている研究なのか、分析テーマと分析焦点者、研究する人について、事例提供者に問いかけながら進めるように意識した。

最初の分析テーマは、作業療法学生のコミュニケーション深化とあったが、コミュニケーション深化に限定されたものなのかどうか、分析の当初から話題になった。学生の変化ということも含む広い変化ではないかとも受け取れた。

ライフレビューブックを作成する際に、相手の個人的なことに焦点を当てて作成しようと意識することで、病気や障害のことを忘れてしまうということも起こっていた。これは、実習等では意識することではあるが、作業の中でその人の異なる側面を知り、相手理解が進んで行ったようにも見える。

学生の相手理解の質と学生の変化、その中でのコミュニケーションの深化ということが少しずつであるが、分析を通して見え始めたように感じた。

今回のワークショップでは、先にあげたように、概念生成に先立つことを丁寧に確認しながら進めて行った。この方針は、倉田先生とも事前に話し合ったので、安心してできた。参加者のM-GTAの取り組みの違いもあったが、最初のところをゆっくりと行ったことで概念生成やその後の分析を行う際の注意点が皆さんに伝わったのではないかと思う。

時間的にも、無理がない時間設定でできたので、次回のワークショップでも同様の時間配分でよいのではないだろうか。

また、SVが事前にすり合わせをしていなかったということがあるが、事前にすり合わせをすることによって、ごこちない進行になることも考えられるので、今回のような形でもよかったと考えます。

【第4グループ】

松永 妃都美（佐賀大学医学部国際保健看護学分野）

Hitomi MATSUNAGA : Division of international Health and Nursing, Saga University, Japan

震災を契機に(母子で)自主避難した母親の経験的プロセス

Mother of empirical process that took refuge with their children in the wake of the Great East Japan Earthquake.

1.研究テーマ

乳幼児と母子避難した母親が母子生活を継続するプロセス

<研究の目的>

2011年3月11日に発災した東日本大震災は、地震・津波・原子力発電所の事故が併発した複

合災害であった。この震災から数年が経過した今なお、多くの被災者が血縁、地縁のない土地での避難生活を継続しており、その中には夫を避難元に残し、乳幼児との避難生活を継続している者が存在している。そこで本研究では東日本大震災の被災地から遠く離れた九州北部での母子避難者に焦点し、彼らが避難生活を継続している意味を深く理解することを研究の目的とする。そして支援が必要なのか、支援を行うとすればどのような支援が求められるのか、保健医療福祉の立場からの検討を行いたいと考えている。

< 本研究の背景 >

東日本大震災を契機として発災した福島第一原発の事故により、東日本から関東広域が放射線による汚染を受けた。しかし福島の事故により環境に放出された放射性ヨウ素の量はチェルノブイリ原子力発電所の事故の1/10であり、事故直後からの被ばく防護対策(食品管理など)が徹底されたために、現在までに事故影響による身体影響は殆ど報告されていない(今後も継続したモニタリングが必要)。しかしこのような低線量被曝の影響には、様々な立場の有識者や報道関係者、活動家等の見解があり、事故直後より SNS(ツイッター・フェイスブック等)や書籍、広報誌などを介して、一般住民、特に子どもを養育する親達の不安を高めるような放射線汚染や放射線影響の情報が発信されてきた。そして福島第一原子力発電所から可能な限り離れた場所への避難を促す情報等が錯綜し、関東圏においてもマイホームを売却して九州や沖縄への避難、移住という選択をした子育て家族や、母子避難を選択した家族が存在している。総務省が把握している被災県内外への避難者数は、福島県内の避難指示区域が約8万人、避難の自己申告者数が約12万人(ほぼ東北被災3県)とされる。しかし関東圏からの自主避難者の多くは避難者登録を行っておらず、その実数、また実態も明らかでない。母子避難を継続することの理解を深めることは、母子避難世帯という家族支援の在り方への示唆を得られるだけでなく、その子供達への支援を模索する上においても貴重な資料となり得る。また一般住民、特に幼い子供を養育する母親達への放射線被ばくや放射線防護に関する情報提供の在り方の検討や構築において重要な知見を得られるものである。

2. 研究方法

○対象者:2011年3月11日以降、夫を避難元に残して血縁、地縁のない九州北部地域に乳幼児と自主避難し、母子生活を継続している母親7名(避難元:福島県1名、千葉県4名、東京都2名)

○調査方法:半構造化面接調査

○インタビューガイド:①九州北部での生活を始めようと決めたきっかけや理由、周囲の反応 ②九州北部に来て、印象に残っていること・嬉しかった事・困ったこと、影響を受けたこと ③これからの生活について

○調査期間:2014年5月1日-2015年6月1日

3. M-GTA に適した研究か

震災により様々な情報と社会的変化に暴露された母親の意識や価値の変容のプロセスがあると

推察される。そのプロセスを明らかにすることにより、地縁や血縁ない地で、夫を避難元に残し、幼い子供との母子生活をする母親の理解を深め、具体的な支援の在り方を提示することか可能になると考えている。

4.DP として参加しての経験 学んだことや感想

DP として採用していただき素晴らしいご指導、研究へのご指摘を頂けましたこと、改めて感謝申し上げます。私個人は、あまり質の良いデータ提供者ではありませんでした。どのような分野で貢献できる成果を得たいのか自覚できておらず、分析テーマがうまく定まりませんでした。そのような時、自分がなぜこの研究をしようと思ったのかという問いをいただき、研究者としてブレてはいけない部分についてご指導を頂けました。研究者としての本質についてご指導いただけたことは、私の今後の研究生活において貴重な財産です。また第4グループの皆様、私のマイノリティな研究にお付き合いいただき、本当にありがとうございました。皆様とのやり取りを繰り返す中で広域避難をした母親という存在を鳥の目のように鳥瞰したり、亀の位置からの視点から覗いたり、視点を合わせたりし、様々な視点から生き生きと捉え直すことができました。私からは紡ぎだせないような表現を沢山頂け、データ分析や質的研究の醍醐味を感じることができました。最後に、やさしく、鋭く導いて下さった阿部先生、松戸先生、本当にありがとうございました。

【SV コメント】

阿部 正子（長野県看護大学）

第4グループの皆さん、合同研究会ではお世話になりました。皆様にとって有意義なセッションとなったでしょうか。私はSVというよりもファシリテータとしての役割を意図した関わりに徹しながら、皆さんが「分析過程を体験する」ことに気を配っていました。その分、概念生成や定義の検討、解釈を深める作業にかかる時間が少なくなってしまう、反省しています。その点については、SV の松戸さんからコメントを頂いておりますのでご参照ください。

第4グループのワークショップ概要ですが、まず1日目は自己紹介をしながらメンバーのM-GTA理解度を確認しました。初学者は少なく、一度はM-GTAで分析をした経験をお持ちの方が多かったので、“同じレベルで討論できるな”という感触が得られました。引き続きDP の松永さんから概要を説明してもらい、どちらのデータを用いるかを決めてから、宿題としていた分析テーマを白板に書いて検討をしました。自分の考えた分析テーマと他人の考えたものを比較したり、なぜそのテーマになったのかを聞いて注目する部分の違いについて考えたり、分析焦点者は誰なのかを検討したり…と、このセッションには2時間を要しました。分析の方向性を決める際、最終的には“研究する人間”の関心が重要になるため、確定するまでにメンバーは何度もDP の松永さんに“この母子にはどうなって欲しいか？”“なぜこの研究をするのか？”“この結果はどのように使えそうか？”と尋ねていました。実は今回のデータは松永さんの研究関心に基づいたインタビューデータではなく、

他の調査目的でインタビューしたら特徴的な語りが見いだせたということで、急きょそれらのデータを M-GTA で分析しようと試みたものでした。研究者自身がこの成果をどのように活用できそうかまだ十分に練られていない段階だったので、問いかけられるたびに揺れてしまうという事態に陥りました。しかし、メンバー全員で辛抱強く分析の方向性をデータに基づき導き出そうと集中して、最終的には「震災を契機に自主避難をした母親が子どものために日常生活を築いていくプロセス」と確定しました。その後、全員でデータを読みひとつ概念を生成するという作業と共有を行い、1 日目は終了しました。

2 日目は各自で概念を 2~3 個作ったものをポストイットに記入して、模造紙にランダムに貼り付けて検討を始めました。概念の説明を受けながら SV がそのポストイットの位置を移動させて、概念間の関係も同時に検討していきました。すると現象特性のような“動き”が立ち現われてきたと同時に、分析テーマにある「母親が子どものために」というよりは、子どもは母親の決定に巻き込まれている感じで、自主避難をする意思決定は“子どものため”の決断だけではないという感触がメンバーの間で強まり、分析テーマの修正が必要だという認識に至りました。DP からも今回の対象者には DV が背景にある者も含まれているという説明からも、“放射能汚染”への恐怖は単なるきかけに過ぎず、本当は逃げるチャンスをうかがっていたかもしれないという潜在的な夫婦関係の問題もあるのかもしれないということも理解することが出来ました。その時に「関東から知り合いのいない九州へ母子だけで自主避難する」という意味が少し分かった気がしました。そうした感触を分析結果に反映させるために、分析テーマをもう少し母親の経験すべてを網羅的に説明できる緩やかな設定とすることにし、「震災を契機に母子で自主避難した母親の経験的プロセス」と決めました。同時に、「家族がいつどのように再生していけそうか」の起点や、「子どもに与える影響の両側面」も含めて結果として示すことが出来れば、支援のポイントが明確になるのかもしれないという感触を得ました。そこからはカテゴリ生成やそれらの関係性について活発な議論が繰り広げられ、あっという間に時間が経ってしまった感じがしました。

私はいつも分析が離陸する際に“現象特性がつかめたという感覚”が助けになると感じています。木下先生も「現象特性は分析の羅針盤的存在」とおっしゃっていますが、今回のワークショップでも 2 日目に手応えを感じた時に、自主避難をしたプロセスで何がどう動いたのか、動くときの促進要因や阻害要因はどんなことがあったのか等の検討が加速され、分析焦点者である母親への理解が深まりました。合同研究会で感じられたこのライブ感、ゼミで複数人と分析テーマを検討することの重要性を再認識する機会となったのではないのでしょうか。一方、今回のセッションではデータの背後にある意味の流れを注意深く読み取り、「これはその人にとってどのような経験のことなのか」を解釈する作業には至っていません。それは引き続き DP の松永さんが個人的に取組み、保健師として彼らをどう理解し支援を展開するかにつながる知見を提示して頂きたいと思います。

松戸 宏予（佛教大学）

第 4 グループを振り返って：合同合宿の役割とは

1. 分析テーマからぶれた概念生成となった背景は？

分科会で提供されたデータを用いて、研究テーマにもとづき、分析テーマを参加者間で話し合い、決定して、実際の分析に進みます。しかし、2 日目の概念の生成、概念間の関係や、プロセスの動きを実際に進めていくなかで、分析テーマから離れていきそうになりました。なぜなのでしょう

か？

研究テーマをあきらかにしていくために、分析する切り口を見つける、つまり、分析テーマを設定していくのですが。基本に戻れば、何をあきらかにしていきたいのか、研究する者の根底があいまいだと、M-GTA をいくら手順に沿って進めていこうと思っても、先に進めないといったことを、今回、体感しました。

2. 合同合宿の役割とは

そして、残り時間が限られていく中、分析テーマを再度、検討しなおし、プロセスの動きを、ポストイットをもちいながらカテゴリー化を図っていきました。しかし、それぞれの概念は、時間の関係で、定義をあまり検討していない仮の概念や、仮の概念の動きでした。つまり、これが最終結果とは言えないのです。

合同合宿の役割は、明らかにしていきたい何かを探索していくため、実際に M-GTA がどのような手順を踏んでいくのか、作業を可視化するデモンストレーションです。

3. デモンストレーションと論文化

定義は、気になった部分は何を意味するのかを確認する作業です。定義抜きでの概念は、後で、解釈しようと思っても、人によって、定義は異なっていくでしょう。概念の検討をしていく段階で、また、堂々巡りになるかと思いました。

もし、今回用いたデータを用いて論文を書こうと思う場合、自分が何をあきらかにしたいのかがあいまいでは、先に進めません(これは、M-GTA に限りません)。木下先生の著書のみならず、査読に通った他の M-GTA 論文も読みながら M-GTA とは何かを理解してください。常に自分自身に確認し、検討することが必要だと感じました。

【第 5 グループ】

増井 香名子（大阪府立大学客員研究員）

Kanako MASUI : Osaka Prefecture University

関係離脱後の DV 被害者が、自分自身の生活/人生を再生していくプロセス

The process by which victims of intimate partner violence reconstruct new life and myself life after leaving their life with batterers

1. 研究テーマ

DV 被害者が暴力関係から「離脱」および被害経験から「回復」するプロセス～当事者インタビューの分析から支援について考える～

2. 研究の背景

夫婦間など親密な関係におこる暴力事件は日々マスコミでも取り上げられ、DV は社会的な問題となっている。DV は、暴力と支配において被害者の人権や心身の安全や健康を著しく脅かす。これまでのわが国の DV に関する調査は被害の実態や被害者の経験する困難を明らかにすることに重点がおかれ、実際に高い割合で DV 被害が 家庭内に存在すること、DV が被害者にもたらす負の影響を示してきた。

しかし、被害者がどのようにして関係の中で生き延び、「暴力のない生活」を手に入れ、被害経験から回復するのかなどの肯定的な側面を明らかにした研究はほとんどみられず、実証的な研究から支援についての検討はほとんどなされていない現状にある。一方、実践現場では、DV 被害者を「支援しても逃れない」「別れてもすぐに戻る」として「困った人」として評される声や支援が難しいという声が聞かれ、被害者理解や支援について実践に有用な理論や方策が必要な現状にある。

筆者は、DV 被害者支援の実践経験を有する。多くの被害者との出会いの中で、起こる暴力のすさまじさと人が人により激しく尊厳を奪われ、傷つけられる現実を目の当たりにしてきた。一方で、暴力関係から力強く「離脱」し、新しい生活を築いていく多くの被害者に会ってきた。このような実践経験の中で被害者支援を考えるにあたって、まずは、暴力のない生活を獲得している被害当事者の経験を理解し、そこから学ぶ必要があるのではないかと考えた。そこで、本研究は、元 DV 被害者へのインタビューデータの分析から、被害者がいかにして「暴力のある生活」から「暴力のない生活」に状況を変化させ、さらに新しい生活を築き、被害経験から「回復」していくのかそれらのプロセスを明らかにすることにより、支援のあり方を検討するものである。

3. 分析テーマ

関係離脱後の DV 被害者が、自分自身の生活/人生を再生していくプロセス

4. 分析焦点者

関係離脱後の DV 被害者

5. 対象者の属性

○DV 被害経験を有する女性 26 名

- ・年 齢:30 代 8 名、40 代 11 名、50 代 4 名、60 代 3 名
- ・子 ども の 有 無:あり 23 名、なし 3 名。
- ・元 夫 と の 関 係:正式婚姻 25 名、そのうち調査時点で離婚済みは、22 名。内縁関係、1 名
- ・受けた暴力の種類:身体的暴力 24 名、精神的暴力 26 名、社会的暴力 20 名、性的暴力 16 名、経済的暴力 19 名

- ・DV被害の期間:1年未満3名、1～3年未満2名、3～5年未満3名、5～10年未満3名、10～15年未満7名、15～20年未満3名、20年以上5名
- ・離脱してから調査協力までの期間:1年未満3名、1～3年13名、3～5年5名、5～10年3名、20年以上2名

感想

このたびは、DPとして参加するという貴重な機会をいただきありがとうございました。日々の仕事や博士論文の作成に追われ、合同研究会がとてもとても昔のことに感じています。しかし、改めて合同研究会を思い返すとなんと不思議で感動的な二日間だったと思います。私自身が大切にしてきた研究テーマやデータを、SVの先生方やグループのメンバーに共有いただき、真摯に向き合い検討いただいたこと本当に贅沢な幸せな時間でした。その中で自分自身曖昧にしていたところも明確になってきて、研究会後早速、修正作業をさせていただきました。

初日は、分析テーマをどう表記するかということに時間を裂いていただきました。想いは明確にあるのですが、それが十分に文字に表現できていないこと、気になりながら曖昧なままにしていたところがやはり曖昧であったということに気づかされました。SVの長山先生、佐川先生に導かれ分析テーマの表現が精査され、また分析で何を明らかにしたいのかするのかを丁寧に共有していただいた初日であったかと思います。

二日目は、初日の宿題であった分析ワークシートを使って生成された概念名をご報告いただくことから始まりました。グループメンバー一人一人から報告を受けたとき、まとを得た着眼や概念名が次々に報告され、通じている・共有されていると、本当に感動しました。初学者もおられると伺っていましたがみなさまのセンスと洞察の高さと共感性の深さに驚きました。二日目から参入いただいた林先生の導きも加わり、黒板に分析結果図として形づくられていき、何ともいえない高揚感と一体感を味わいました。

二日間を通じ、思わぬ質問を受けて回答に右往左往しながら頭をぐるぐる思考したり、感じる違和感があるのかを自問自答し言葉で説明を試みたりする中で、思考が整理され言葉が見出されていく醍醐味を味わいました。それは時間をかけても自分ひとりではけっしてなし得ることが出来ないことだったと思っております。

佐川先生、長山先生、林先生、一緒に分析データに向きあっていただいたグループの皆様、世話人のみなさまに心より感謝いたします。ありがとうございました。何とか研究を形にし、被害者支援に還元できるよう精進していきたいと思います。今後ともご指導よろしくお願い致します。

【SVコメント】

長山 豊（金沢医科大学）

今回の合同研究会では、SVとして進行させて頂く機会を頂きました。佐川先生には要所要所で

ワークショップの進行をサポートして頂き、参加者の皆様による活発な意見交換に助けられ、大変貴重な学びの機会となりました。データ提供者の増井さんは DV 被害者と現場で向き合い、支援を蓄積された経験が基盤となって研究に取り組まれておられました。増井さんが分析焦点者の生活のあり様について私たちに語りかけてもらう中で、分析焦点者がどのような人々なのか非常に具体的に想起できるようになり、緻密な心の機微をキャッチしながら分析を深めることができました。

1 日目の最初の自己紹介にて、参加者皆様のバックグラウンド、M-GTA を今後どのように活用していきたいか等、詳細にお話ししてもらいました。参加者の皆様の現場的かつ研究的な関心が浮き彫りになり、距離が縮まり、後のディスカッションの活発さにつながったように思います。

次に、増井さんより研究背景を丁寧に説明してもらい、分析テーマの検討を行いました。今回のデータ範囲として DV 被害者が夫の DV を受ける環境から離脱した時点が「始点」とであると共通認識を持ちました。では、「終点」として増井さんが説明されている「回復」とはどのような状態を指すのか、どのような意味で用いているのか、メンバー間で試行錯誤しながら意見交換しました。増井さん自身も「適当な言葉が見つからない」感覚を抱いており、メンバーから「解放されていく」「未来へ向かって推進する」「自分自身を取りもどす」など様々なアイデアが出ました。「回復」のプロセスには能動的・主体的な行動だけでなく、偶発的な現象によって癒しを得たり、受動的に支援を受けたりと様々なプロセスがあるようでした。DV 被害者は、支配構造の中で生きていた脆弱な自分へ揺り戻される恐怖や不安を抱えながら、以前とは違う新しい人生/生活をつくっていくというプロセスに焦点を当て、今回の分析テーマは「再生していく」というごきに着目することとなりました。このディスカッションを通して、研究者がデータの本質部分のうごきについて、他者と共通理解が得られるように積極的に説明する作業が非常に重要であり、他の類似した領域でも応用可能な理論をつくっていくことにつながるように感じました。

そして、設定した分析テーマに基づいて概念生成を行いました。分析焦点者の自己否定的な心理に関するバリエーションへの着目が集中しましたが、それだけではなく、過去の自分との対話を繰り返しながら自己を客観視し、気づきを得て新しい生活やアイデンティティを再構築していく「再生」のうごきも見えてきました。さらに 1 日目の終わりの時点で、分析を活性化していくために増井さんから現象特性の説明をしてもらいました。そして、2 日目にメンバー間でもう一度生成し直した概念を持ち寄ると、分析テーマに沿った多様な概念生成へと大きく変化していました。分析テーマをメンバー間で何度もすり合わせてディスカッションを重ねていくことで、サンプルデータの中で今まで気付かなかった現象の意味を拾い上げられるようになり、浮上する体験ができたように思います。概念の質が変化していった背景には、「なぜ、そのバリエーションに着目したのか」をメンバー間で言語化して解釈を共有し、データに戻って確認することを繰り返す分析過程の中で、概念が練り上げられていったからではないでしょうか。そして、概念間の関係性を検討し、林先生にも手厚くサポートをして頂きながら、一つの結果図を作成するまでに至りました。

今回の分析ワークショップを通して、研究者が grounded on data の視点を持ってフィールドの現象に向き合っていくという姿勢そのものが、現象の多様性を表現できる概念生成につながっていくように感じました。参加者の皆様とデータと向き合いながら作りあげていく体験ができ、新しい発見

が非常に多く、とても貴重で楽しい学びの場となりました。参加者の皆様に心より感謝申し上げます。また、SV の進行で全面的にサポートして頂いた佐川先生に重ねて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

【第6グループ】

大友 秀治（北星学園大学社会福祉学部）

Shuji OTOMO : Hokusei Gakuen University School of Social Welfare

スクールソーシャルワーク活用事業を発展させるスーパービジョンモデルの構築:「効果的なスクールソーシャルワーク事業プログラム」に着目して

Construction of the supervision model developing the school social work utilization business: Attention to “The Effective Business Program Of The School Social Work”

I. 研究の背景と目的

1) 研究の背景

ソーシャルワークにおけるスーパービジョン(SV)は、実践家の専門性を向上させる方法や過程として、国内外において重要視されてきた。SV の機能に関して、教育的機能、支持的機能、管理的(行政的)機能があることは、SV の定義において国内外でコンセンサスが得られている(石田 2006:74)。国内では、これらの機能を用いる「専門職の業務全般をバックアップするための職場の確認体制」(福山 2005:198)という定義が引用される場合が一般的である。

そのようななか、スクールソーシャルワーク(SSW)領域における SV 研究は、近年取り組まれ始めた段階である。門田ら(2014)は、全国 23 自治体における SV の実施実態について、各機能を用いた SV 内容や頻度において、自治体によって大きな差異があるため、SV システムを整備する必要性を明らかにしている。しかし、近年の SV 研究は、事例研究や実践省察、事業報告に多くを占められており、SV システムが未整備の現状を解決するには限界があると考える。現在、SSW における SV モデルやプログラムの開発研究もなされていない。

2) 研究の目的

そこで、本研究は、SSW 実践の可視化と SSW 事業の進展を目的とした「効果的なスクールソーシャルワーク事業プログラム」(SSW 事業プログラム)(山野 2015;山野他 2015)を活用し、自治体の SSW 活用事業の仕組みづくりに関与しているスーパーバイザー(SVr)やスクールソーシャルワーカー(SSWer)が、どのようなプロセスと実施内容、視点や意図によってプログラム実施支援を行い、教育との協働を促進するマネジメントを実施しているかを明らかにする。それにより、①SSW 事業の進展というマクロに働きかけ、②エビデンスに基づき、③学校文化に即した教育と福祉の協働を促進する SV の可視化・理論化を行い、SV モデルを開発することを目的とする。

Ⅱ. 分析焦点者

SSW 事業プログラムを活用し、SSW 活用事業のシステム発展に働きかけている SVr と SSWer

Ⅲ. 分析テーマ

SSW 事業プログラムを活用している SVr と SSWer が、SSW 活用事業のシステムづくりを発展させるプロセス

<参考文献>

石田敦(2006)「ソーシャルワーク・スーパービジョンの定義の混乱の背景にある諸問題」『吉備国際大学社会福祉学部研究紀要』(11)、73-83.

門田光司他(2014)『スクールソーシャルワーカーのスーパービジョン研究:日本・アメリカ・カナダ・韓国での調査報告』科学研究費・基盤研究(B)報告書.

福山和女編著(2005)『ソーシャルワークのスーパービジョン:人の理解の探求』ミネルヴァ書房.

山野則子(2015)「効果的なスクールソーシャルワーク事業プログラム・モデルの開発」『ソーシャルワーク研究』40(4) 23-34.

山野則子他(2015)『エビデンスに基づく効果的なスクールソーシャルワーク:現場で使える教育行政との協働プログラム』明石書店.

Ⅳ. DPとして参加しての体験、学んだことや感想

この度は、大変貴重な機会をいただき、誠にありがとうございました。まず、研究テーマとその基本用語を参加者の皆様にお伝えするなかで、自分では当たり前と思っていることがスクールソーシャルワークの特性でもあり、分かりづらさでもあることを学びました。それは、研究テーマについて改めて吟味する機会ともなりました。

また、研究テーマと同様に分析テーマについても、時間をかけて議論していただきました。主人公の属性や相互作用相手が複雑というご助言をいただき、これらを明確にしつつ、主語と述語をしっかりと定めることが、定義を検討していくために非常に重要であることを教えていただきました。

このような、前提になる作業を丁寧に進めてくださったおかげで、初期段階のプロセスが浮かび上がってくる感触を得ることができました。分析テーマの明確化と、比較的思考による概念生成を、地道に丁寧に進めていく具体的な視点と方法を教わることができたと考えています。

これらの経験を通して今後の方向性が見えてきました。スーパーバイザーの根本愛子先生、唐田順子先生、第6グループの参加者の皆様に改めて感謝申し上げます。引き続きスーパービジョンを受けながら、さらなる分析を頑張ってまいります。今後ともご指導のほどよろしくお願いいたします。

【SVコメント】

根本 愛子 (国際基督教大学)

今回の合同研究会では、唐田先生と一緒に第6グループを担当させていただきました。DPの大友さんからは、スクールソーシャルワーカーのSVをされている方のインタビューデータ2名分をご提供いただきました。

1日目は全員の自己紹介からはじめましたが、お互いの人となりがわかるように、あえて専門分野ではなく「最近うれしかったこと」をお話しいただきました。その後、研究の背景と目的をDPの大友さんに説明していただき、データ内の用語などさまざまな情報を共有したうえで、分析焦点者と分析テーマの設定を行いました。その結果は、最初にDPから提示されたものとはほぼ同じでしたが、おそらくこの時点で分析テーマが「きちんとはまった」という感覚ができたのではないかと思います。これにより、「漠然と考えた分析テーマ」と「しっかりと検討した分析テーマ」は、表記は同じであっても、それが持つ意味が違うというのが感じられたと思います。初日はその後、概念生成の仕方を確認し、概念生成を宿題といたしました。

2日目は、各自生成してきた概念を突き合わせ、着目した箇所(ヴァリエーション)が同じ人で小グループを作り、それぞれのテーマで部分的にプロセスを検討しました。その際にDPから新しい情報が出てきたことで、インタビュー協力者と1日目に設定した分析焦点者にズレがあることがわかりました。便宜上、分析焦点者を変えずに進めましたが、実際には分析焦点者の再検討が必要な場面でした。また、最後、全体のまとめをする時間が十分取れなかったという点は申し訳ありませんでしたが、分析の一連の流れは体感していただけたのではないかと思います。

以下、個人的な感想になります。

今回の分析ワークショップでわたしが改めて考えたことは、いかに「集中する」かということです。

例えば、DPの説明を聞いていると「Aについてやりたいのだろう」と感じられるものの、実際には「Bについてやる」ということで、あれ?と思うことがありました。話を聞くと、「実際にやりたいこと」と「研究としてまとめるためにやろうとしていること」に隔たりがあるためだということがわかりました。また、分析の最中で新たな情報が出てくるのですが、その情報はインタビューデータにはないもので、少々混乱させられる場面もありました。これは、扱っているテーマについていろいろな背景知識があるからだと思われました。

自分自身を振り返ってみても、こうした隔たりや混乱は分析の最中に往々にして生じることだと思います。問題は、これをいかに乗り切るかではないでしょうか。

まず、「やりたいこと」と「やるべきこと」の隔たりを埋める方法は2つあると考えました。「研究としてまとめることは二の次とし、自分のやりたいことに集中する」か、「研究としてまとめることを優先させ、やりたいことは(少し)我慢する」かです。いずれを選択しても、結局は分析焦点者と分析テーマに「集中する」ということになります。また、データ以外の情報に左右されるのは、データに密着した分析が徹底できていないということになります。背景知識があるのは当然のことですが、そうした中でいかにデータに「集中する」かが大事ではないかと感じます。

結局のところ、分析焦点者と分析テーマ、そして、データに「集中する」には、「研究する人間」としてシンプルに、「何のために」「何を」「どうしたいのか」を考え続けること、そして、分析の基本である「分析焦点者、分析テーマ、データに密着」を忘れないこと…という基本的なことを徹底すればよ

いという結論にいたりました。

参加者の皆さんがこれと同じことを感じている必要はありませんが、何かしらの発見があったのなら幸いです。

最後になりますが、今回貴重なデータを提供してくださった大友さん、そして、今回の合同研究会のためにご尽力くださった西日本 M-GTA 研究会の先生方をはじめとする合同研究会ワーキンググループの先生方に改めて御礼申し上げます。有意義な 2 日間をありがとうございました。

◇近 況 報 告

(1) 氏名、(2) 所属、(3) 領域、(4) キーワード

- (1) 岡本 茂
- (2) 京都大学社会健康医学系健康情報学／洛和会音羽病院小児科
- (3) 小児科領域
- (4) 川崎病、小児科医、総合小児科学、組織論、情報マネジメント・エスノグラフィー

市中病院に勤務する 2 代目の小児科医です。自分自身がなぜ小児科医なのかに疑問をもち、小児科医として診療する傍ら、小児科の診療・診察等に関して、小児科を志す若い研修医と勉強会をしています。M-GTA 分野に関しては医師職自体がマイノリティですがさらに医師職のなかで、内科でも外科でもなく、家庭医でもなく総合診療医でもなく小児科自体がマイノリティであることを病院の中の立ち位置で常を感じています。現在、2009 年の新型インフルエンザに対する小児科の対応をまとめ中もうすぐと考えています。今回、研究会に参加して研究に関しての皆様の真摯な態度に感銘を受けました。M-GTA に関しては小児科医＝研究する人間としていいのかという点から試行錯誤です。スーパーバイザーに関心があります。

さらに木下康仁先生はどういうプロセスで M-GTA を考案されたのかに関心があります。カルフォルニア大学時代からでしょうか。学生としての木下先生が『データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか』以外に重要だと思われた本のリストや学位論文が知りたいです。

-
- (1) 原田 美穂子
 - (2) 関西看護医療大学
 - (3) 成人・老年看護学領域
 - (4) ボディイメージ、乳がん、乳房切除術後、日本文化

これまで何回か木下先生と山崎先生のご講義とワークショップに参加させていただく機会がありました。今回の合同研究会では、スーパーバイザーの先生に導いていただくことによって、どのように進めていくのかをじっくり体験することができました。考え方のポイントや理論的メモにどのようなことを書くのかなど、大変具体的なポイントを学びました。早速自分の研究に活用しています。これからも多くの学びが得られます事を期待しております。

-
- (1) 宮城島 恭子
 - (2) 浜松医科大学
 - (3) 看護学
 - (4) 小児がん経験者、思春期、成人移行期

第4回合同研究会に参加させていただき、とても充実した2日間となり、研究への意欲が高まりました。

木下先生の基調講演では、他のGTAと比較してのM-GTAの特性についてこれまでより理解が深まりましたので、M-GTAの立ち位置や何故M-GTAを用いるのかについて、これまでよりもしっかり説明できるようになりたいです。

ワークショップでは、様々な背景をもつ方々としっかり意見交換ができ、自分でも考えて理解が深まることは楽しく、孤独でつらいも研究も楽しめることを感じました。分析テーマをしっかりと絞り込むと、その後の概念生成や概念間関係の検討もしやすくなることや、それらの過程で、「コア・中心」をしっかりと捉えたとぶれないことなどを実感しました。また、分析ワークシートの理論的メモの書き方は、これまで自己流でこれでいいのかなと思うところもありましたが、他の人の記載したものを見たり、SVの先生方がところどころ「それも理論的メモに書いておく」とコメントしていたのを聞いて、これまで通りに検討事項も含めて考えたことを残していっていいと確認でき自信になりました。そして、データ提供者の方のディテールの豊富なデータを見せていただき、自身のデータのとり方について検討したいと考えることができました。

さらに、多領域の方々と交流でき、自分の研究について相談させていただく機会もあり、充実した2日間になりました。これらの学びや意欲の高まりを今後の研究に活かしたいと思います。このような機会をつくってくださった企画・運営・SVの先生方、ワークショップで同じメンバーになった皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

-
- (1) 山本 裕子
 - (2) 京都府立医科大学 保健看護学研究科 修士課程

(3) 看護

(4) 看護教員、生涯学習行動

私は現在、看護学修士課程で論文作成に取り組んでおります。また、看護専門学校専任教員として勤務しています。看護学生に大きな影響を与える看護教員は生涯にわたり学習し、自己教育力を身につけて自己研鑽していかなければなりません。そのため教員としてより良き教員を希求する日々であります。そして、私は多忙を極める中で自助努力するということの意味について考えることが多くなりました。非常に多忙でまた継続システムも途上の中で教員たちは「自ら学んでいく」ことをどのように自分自身の中で創り上げているのかということに、大いなる関心をもちこの研究を始めようと思いました。

そして、今回 M-GTA 合同研究会に初めて参加させていただきました。先行文献や、木下先生の本を熟読したつもりでございましたが、やはり実際、講演を聴講させていただき、グループワークして学ぶことで、分析の視点や他職種の方々の興味・関心の視点が多くあることを知りました。自分の狭い視野でしか考えられないことが皆様の意見でとても刺激を受けました。やはり、1人で本を読んで、文献とにらめっこしているだけでは視野は広がりません。多くの方々と関わり触れ合い、意見交換することが大切だと思いました。

現在、修士論文にむけてインタビューを始めています。しかし、卒業まで半年となりましたので理論的飽和に至る前に、終了して分析をしなければなりません。

M-GTA を用いて指導してくださる先生もいないため、今回の合同研究会での学びをもとに、基本的なことから、はずれないように分析していこうと思いますが、正直、不安です。

今後も M-GTA の勉強をして、いつか研究成果が実践に活かせるように継続して学んでいきたいです。ありがとうございました。

.....

◇M-GTA 研究会第 77 回定例研究会のお知らせ

日時:2016 年 11 月 12 日(土)13:00～18:00

会場:大正大学

.....

◇編集後記

編集後記合同研究会に参加してきました。2度目の参加でしたが、合同研究会の醍醐味は、なんといっても少人数のワークショップ形式で、M-GTA のライブ体験ができるということ。全国からの参加者やSVの先生方と一緒に、2日間かけて分析テーマの設定から概念名の生成や結果図の作成まで行い、M-GTA の分析の流れを肌で理解できる貴重な機会となりました。一つのデータを囲んでグループの皆さんと熱く議論したことも良い思い出になりました。主催をしてくださった西日本M-GTA 研究会の皆様に感謝いたします。帰りには、久しぶりに大阪の街を歩いて(私の出身地なのです)、リフレッシュできました。皆様も是非次回の合同研究会にご参加ください。(田村)